

旭混声合唱団

第8回演奏会

瀬戸市文化センター 文化ホール
2011年10月30日(日)午後2時開演 (開場 午後1時30分)

主 催
旭混声合唱団

後 援
瀬戸市・瀬戸市教育委員会・尾張旭市・尾張旭市教育委員会
長久手町・長久手町教育委員会・愛知県合唱連盟



ご挨拶

ご来場の皆様、こんにちは！

本日はお忙しい中、旭混声合唱団第8回演奏会へお越しいただき、誠にありがとうございます。
また、日頃は私達の活動に対しまして温かいご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

去る3月11日の東日本大震災により、未だ厳しい状況下におかれている方々もたくさんおられることと存じます。団員一同心よりお見舞い申し上げるとともに一日も早い復興を願っております。

旭混声合唱団は今年でちょうど創立25年を迎えました。ご多分に漏れず、高齢化社会の様相を呈しておりますが、団員一同まだまだ気力は衰えず、先生方の熱心で温かくも厳しいご指導のもと合唱の楽しみを満喫し、心の豊かさを追い求めています。

本日は、アカペラ宗教曲集、古典を題材とした『良寛相聞』、新進の作曲家である信長貴富氏編曲の『近代日本名歌抄』とブラームス作曲『Nänie（哀悼歌）』を演奏いたします。特に『Nänie（哀悼歌）』では、ピアノと木管楽器の伴奏という、わが団にとっては初めての試みに挑戦しました。

団員一同、心を込めて精一杯歌いますので、どうぞお聴きください。

旭混声合唱団

団長 合瀬弘正

プログラム

I 宗教曲集 ～ アカペラの響き ～

- | | | | |
|---|-----------------------------------|--------------------|---|
| 1 | <i>Cantate Domino</i> | <i>H. Hassler</i> | 曲 |
| 2 | <i>Locus iste</i> | <i>A. Bruckner</i> | 曲 |
| 3 | <i>Ave Maria (Angelus Domini)</i> | <i>F. Biebl</i> | 曲 |
| 4 | <i>Ave maris stella</i> | <i>E. Grieg</i> | 曲 |
| 5 | <i>Cantate Domino</i> | <i>V. Miškinis</i> | 曲 |

II 混声合唱とピアノのための「良寛相聞」

良寛・貞心尼 作詩 千原英喜 作曲

- 1 相聞Ⅰ／パストラーレ
- 2 手まり
- 3 君や忘る道
- 4 相聞Ⅱ／夢の世に

***** 休憩 (15 分) *****

III 混声合唱とピアノのための「近代日本名歌抄」

信長貴富 編曲

- | | | | | | |
|---|----------|------|----|------|----|
| 1 | あの町この町 | 野口雨情 | 作詞 | 中山晋平 | 作曲 |
| 2 | 宵待草 | 竹久夢二 | 作詞 | 多 忠亮 | 作曲 |
| 3 | ゴンドラの唄 | 吉井 勇 | 作詞 | 中山晋平 | 作曲 |
| 4 | 青い眼の人形 | 野口雨情 | 作詞 | 本居長世 | 作曲 |
| 5 | 影を慕いて | 古賀政男 | 作詞 | 古賀政男 | 作曲 |
| 6 | カチューシャの唄 | 島村抱月 | 作詞 | 中山晋平 | 作曲 |
| | | 相馬御風 | | | |

IV *Nänie* (哀悼歌) op. 8 2

F. Schiller 作詩

J. Brahms 作曲

曲目解説

I ア カペラの響き

- ・ *Cantate Domino* (H. Leo Hassler)

ハンス・レオ・ハスラー（1564頃～1612）は、ルネサンス期ドイツの作曲家。ドレスデン宮廷礼拝堂のオルガニストとしては、M. プレトリウスやH. シュッツの前任者にあたる。ルネサンスのポリフォニー様式からバロック様式への橋渡しを担った作曲家と言えよう。「主に向かい 新しき歌を歌え」と、歯切れ良く明るく歌われる。

- ・ *Locus iste* (A. Bruckner)

ブルックナー（1824～1896）はオーストリアの作曲家で、交響曲がよく知られているが、自身も教会（リンツ郊外の聖フローリアン教会、ブルックナーの棺が地下に納められている）オルガニストで敬虔な信仰心を持った人であった。合唱曲では、今日演奏する *Locus iste* などの、宗教的な歌詞をテキストにしたモテットを数多く作曲している。

- ・ *Ave Maria* (F. Biebl)

フランツ・ビーブル（1906～2001）はドイツの作曲家。主に合唱曲を書いた。教会の合唱指揮者を経て、ザルツブルクのモーツァルテウムで教鞭を執る。彼の *Ave Maria* は *Angelus Domini* という副題が付き、男声ソロが入り、セミコーラスとコーラスが掛け合う形になっているのが特徴的。1964年の作品で、コーネル大グリーやシャンティクリアのレパートリーにもなっている。

- ・ *Ave maris stella* (E. Grieg)

グリーグ（1843～1907）はノルウェーの作曲家。北欧の、静かであるが内に秘めたしたたかな情熱が音楽ににじみ出ている作風で、この曲にもそれがうかがわれる。「めでたし 海の星」という歌い出しだが、海の星とは聖母マリアのことで、「全ての恵みを祈って下さい 清らかな命を授けて下さい」と歌い進み、「いと高きところのイエス・キリストにと、聖霊に称えがありますように。三位一体たる神に同じように栄光があらんことを」と結ぶ。

- ・ *Cantate Domino* (V. Miškinis)

ミシュキニス（1954～）はリトアニアの作曲家・合唱指揮者。リトアニアのみならず、世界各国の合唱指導やコンテストに活躍の場を広げている。*Cantate Domino* は静謐な宗教曲のイメージを打破したと言っても過言ではない、エネルギーに満ちた躍動感溢れる佳曲である。

II 混声合唱とピアノのための『良寛相聞』

良寛和尚として知られる良寛は、江戸後期の禅僧・歌人、越後の人である。よく村童と遊び、脱俗生活を送り、高潔の人と崇められた。1831年没で、今年ちょうど没後180年にあたる。老境にさしかかった頃、約30歳年下の貞心尼が良寛に教えを請うようになり、やがて貞心尼は、病に伏した晩年の良寛に寄り添うようになる。『良寛相聞』のテキストは、この良寛と貞心尼が読み交わした相聞歌集ともいべき、貞心尼の編集による「蓮（はちす）の露」に基づいている。

1 相聞 I / パストラーレ

「歌を詠みましょうか、手まりをつきましょうか、野に出てみましょうか。あなたの思うままに任せて、何をして遊びましょうか。」と貞心尼。「それでは歌を詠もうか、手まりをつこうか、はたまた野にも出てみようか、一つには決められないなあ。」と良寛。夢を見ているように歌が漂い、二人が呼び交わすように流れていく。

2 手まり

長い冬が去り、春が到来する。良寛は子どもたちに交じって手まりをついている。なかなかの腕前だ。「子どもらと遊ぶ春の日は暮れずともよし」と、弾む心をポップな感覚で歌う。

3 君や忘る道

「あなたは私の庵への道をお忘れでしょうか。草が生い茂って道を隠したのか、それともあなたがこの道を忘れてしまったのか。待てど暮らせどあなたは来ない。また来てください。」と良寛が貞心尼に向けて切々と歌う。

4 相聞Ⅱ／夢の世に

貞心尼「あなたにこうしてお会いした嬉しさはいまだ覚めやらず、これは夢なのかと思います。」良寛「夢のようにはない世の中、あなたとの出会いも微睡みの中の夢の出来事、そしてそのようにあなたに語っていることもまた、夢のようであり、それはそれで良いのでしょう。」夢のまた夢の、そのまた夢の中へ、めくるめく恍惚が展開していく情念の世界。

Ⅲ 混声合唱とピアノのための『近代日本名歌抄』

昭和、平成と時代は進み、「歌謡曲」という単語も古めかしい響きをもつようになりました。最近のJ-POP（K-POPも）の曲が次第に遠くに感じられるこの頃、日本語の「うた」に立ち返り、再度私たちの胸の奥に届く響きを作りたい、という思いでこのステージを組んでみました。「坂の上の雲」ではないけれど、ちょうど日本が明治から大正、昭和へと、西洋を意識しながら、させられながら時代を進んでいった頃の音楽文化が染み込んでいる作品ばかりです。

1 あの町この町（大正13年）

児童雑誌「コドモノクニ」初出。本来の第2節「お家がだんだん遠くなる…」の部分は本編曲版では割愛されている。具体的にどこの町なのかも示されず、「帰りゃんせ」とおそらく子どもに向かって歌っているが、子どもは出てこない、それでも不思議な郷愁を誘う歌である。

2 宵待草（大正6年）

本来、植物学的には「マツヨイグサ（待宵草）」が正しく、群生して黄色い可憐な花をつける植物のことである。夕刻に開花して夜の間咲き続け、翌朝には萎んでしまうこの花のはかなさが、一夜の恋を象徴するかのようである。

3 ゴンドラの唄（大正4年）

『カチューシャの唄』を手がけた中山晋平により作曲され、同曲同様に大衆の支持を得た。中山によれば、母の死の直後、悲しみに暮れる帰りの汽車の中で「『ゴンドラの唄』の歌詞が語りかけて」きて、「汽車の揺れとともに、自然と旋律がわいてきた」のだという。

4 青い眼の人形（大正10年）

米国で日本人移民の排斥運動が広がっていた1927（昭和2）年、親日家の宣教師シドニー・ギュリックが、約1万2千体を日本各地の小学校に贈った。太平洋戦争開戦後、「敵性人形」として多くが壊されたり、焼かれたりした。雨情の作詞は人形交換より数年さかのぼる。

5 影を慕いて（昭和6年）

昭和流行歌の傑作のひとつとされる。本作には作曲者古賀政男の人生の苦悩・絶望からの魂の叫びが込められている。古賀は己のロマンチシズムへの絶望から自殺を図っていたが、そのときに蔵王にかかった夕焼けを見て『影を慕いて』の一片の詩が浮かんだという。

6 カチューシャの唄（大正3年）

劇団芸術座の公演である『復活』の劇中歌として、主演女優の松井須磨子などが歌唱した。ヨナ抜き音階のような伝統的な日本の音楽表現やリート形式の西洋音楽の手法を取り入れている。

Ⅳ 『Nänie（哀悼歌）』 op.82

「美しいものも滅びねばならない」という歌詞で始まり、「愛する者の口で歌われる哀悼歌もまた素晴らしい」という歌詞で曲を閉じるこの佳曲は、ベートーヴェンの第九交響曲「歓喜の歌」の作詩で知られるF・シラーのテクストによる。ブラームスの友人で画家のフォイエルバッハの死を悼むために書かれ、彼の義母に捧げられた。出だしの歌詞を具体化する、ギリシャ神話に基づくエピソードが数編歌われ、次第に芸術的に昇華されていく。途中激しい部分もあるが、曲は最後に向かって二長調という明るい調性で支配される。オーケストラ伴奏にしては短いためか、例えばドイツ・レクイエムと共に演奏されることはあっても、単独では演奏される機会が少ない。ピアノ伴奏で演奏される形態がほとんどだが、冒頭、そして後半のオーボエソロは捨てがたく、今回はピアノに加え木管アンサンブルに参加して頂くという少々イレギュラーな伴奏となった。が、ピアノ伴奏のみではおそらく得られない音の厚み、温かみ、ふくよかさといったものが豊かな味わいとして醸し出され、この曲の良さをより豊かに表現できるものと考えている。

（神谷伸行）

プロフィール

指揮者 **神谷伸行**



同志社大学文学部英文学科卒業。在学中はグリークラブにおいて指揮者として活躍、指揮法及び編曲法を故福永陽一郎氏に師事した。卒業後は声楽を平野忠彦氏に師事、ドイツリートからオペラ、コンサートアリア、日本歌曲まで幅広く薫陶を受ける。その後大学や一般の男声合唱団の指導を経て現在に至る。合唱曲の作曲、編曲も手がけ、特に男声編曲版は瀬戸男声合唱団、名古屋男声合唱団、尾北男声合唱団などの演奏会でとり上げられ、好評を博した。日本の合唱作品、ルネサンス宗教作品からロマン派、現代曲に至るまで幅広く取り組み、「ことば」を大切に、歌う側も聴く側も共感・連帯できるあたたかい音楽作りをめざしている。

ピアニスト **石川ひとみ**



国立音楽大学卒業。卒業後、アンサンブルを中心に活動を開始。名フィル奏者はじめ、国内外のソリストと多数共演。また、近年は合唱団との共演も多く、新実徳英、吉村信良、関屋晋との共演経験を持つ。共演者から学ぶ多くの経験を活かし、室内楽、器楽伴奏、合唱伴奏、新作演奏などのアンサンブル活動を続け、地元演奏家のリサイタル、器楽、合唱のコンクールなど各種受賞につながる共演回数も多い。1989年より旭混声合唱団のピアニストを務め、現在は大学、一般合唱団の常任ピアニスト、トリオ de プランチ、H.I.T.、ひとはな四重奏団、コンサートグループ「花の詩」のメンバーとして活動。

ボイストレーナー **毛利美奈子**



名古屋音楽大学音楽学部声楽科卒業。ソプラノ歌手として、多数のオペラ・オペレッタ・コンサートに出演。又、宗教曲のソリストとして出演し好評を得る。名古屋オペラセミナーにて演出家松本重孝、コレペティトゥーア揃洋子、イタリア語表現河原廣之の各氏よりオペラ表現法を学ぶ。'04年イタリア留学。シエナを中心に、ローマ、ナポリに滞在しイタリア語およびオペラレパートリーの研鑽を積む。ローマにて指揮者 M.Boemi 氏のレッスンを受講。声楽を早川直子、小島琢磨、山本みよ子、小林史子氏に師事。古楽歌唱法を宇田川貞夫氏に師事。旭混声合唱団、知立市パティオ・シアター合唱団、ボイストレーニングサークル「ひばり」ボイストレーナー。名古屋バロック音楽協会会員。

オーボエ 山本直人



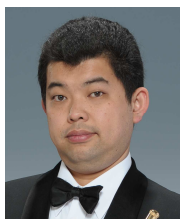
’85年武蔵野音楽大学を首席で卒業。第55回読売新人演奏会等に出演。陶山勝、吉成行蔵、北島章、インゴ・ゴリツキの各氏に師事。’86年名古屋フィルハーモニー交響楽団に入団。’92年2月より一年間ベルリンに留学し、アンドレアス・ヴィットマン氏に師事。’04年名古屋市民芸術祭2004審査員特別賞を受賞。「名古屋ヴィルトゥオーゼン」「名古屋ダブルリードアンサンブル」等の主要メンバーとして室内楽活動も盛んに行う傍ら、名古屋音楽大学、大垣女子短期大学音楽総合科、明和高等学校音楽科非常勤講師として後進の指導にもあたっている。

オーボエ 小室真美



愛知県立芸術大学音楽学部卒業。同大学院修士課程修了。オーボエを小畑善昭、故岩崎勇、渡辺潤也の各氏に師事。ザルツブルク・モーツァルテウム夏期講習会にてインゴ・ゴリツキ氏のマスタークラスを、上石津オーボエキャンプにてフランチェスコ・ディ・ローザ氏のクラスを受講。名古屋二期会オペラ管弦楽団、アンサンブル21、名古屋ダブルリードアンサンブルメンバー。現在、東海地方を中心にオーケストラ、室内楽などで活動中。

フルート 寛孝也



愛知県立芸術大学音楽学部卒業。同大学院修了。これまでにジョイントリサイタルを2回、’09年にはリサイタルを開催する。東海地方を中心に、ソロ、アンサンブル、オーケストラ等で演奏活動を行っている。フルートを村田四郎氏に師事。日本フルート協会会員、名古屋笛の会副会長、名古屋フランス音楽研究会、愛知ロシア音楽研究会会員。名古屋二期会オペラ管弦楽団、アンサンブル・ノービレ団員。南山国際高等・中学校非常勤講師。

フルート 松原雅美



9歳よりフルートを始め、信愛学園高等学校音楽科(現:浜松学芸高等学校音楽科)、愛知県立芸術大学音楽学部を卒業。同大学卒業演奏会、その他新人演奏会に出演。フルートを田中貫一、長山慶子、寺本義明各氏に師事。現在、東海地方を中心にオーケストラ、吹奏楽、室内楽など演奏活動の他、後進の指導も行っている。愛知室内オーケストラフルート奏者。フルートとマリンバ、打楽器のトリオ『フルリン打』メンバー。一宮市消防音楽隊委託演奏員。

クラリネット 浅井崇子



名古屋市立菊里高等学校音楽科、東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。オーストリアモーツァルテウム音楽大学に留学。第10回ドスエルマナス国際クラリネットコンクール(セビリア・スペイン)第1位。第21回日本管打楽器コンクールクラリネット部門第3位。第7回日本クラリネットコンクール第3位。日演連新人演奏会で名フィルとコンチェルトを共演。現在、名古屋フィルハーモニー交響楽団クラリネット奏者。

クラリネット 山根奈々



名古屋音楽大学卒業。同大学卒業演奏会に出演。ヤマハ管楽器新人演奏会に出演。東京ミュージック&メディアアーツ尚美ディプロマコース卒業。これまでにクラリネットを亀井良幸、横川晴児の各氏に師事。クラリネット及び室内楽を井上京氏に師事。エルンスト・オッテンザマー、ロルフ・ウェーバーの各氏の公開講座を受講。現在フリーで演奏活動するかたわら後進の指導にもあたっている。

旭混声合唱団団員

ソプラノ

岩本 純子	久野 希見子	小坂 光代	嶋田 妙子	須田 千賀子	谷口 千賀子
角田 美和子	中沢 佳代	長苗 陽子	橋詰 ひろみ	波多野 ユキ	波多野 陽子
早澤 満利子	林 優美子	原 恵里子	藤田 美左紀		

アルト

伊藤 雅代	植村 尚子	梅村 和子	大栗 尉子	大沢 泊子	後藤 せつ子
酒井 富子	須寄 麻弓	高橋 園子	内木 栄子	中畑 チズ子	前川 久美子
松本 恵美子	水野 真弓	森下 修子	吉原 直子		

テナー

梅村 治康	合瀬 弘正	加藤 雅秀	酒井 敏行	林 丁三
-------	-------	-------	-------	------

ベース

近藤 進	佐竹 保	中島 一彦	橋詰 喬	早澤 信昭	林 松男
松本 義明					

旭混声合唱団では団員を募集しています
～ 見学随時受付中 ～

練習時間：毎週土曜日または日曜日 19：00～21：00

練習会場：尾張旭市旭丘公民館（尾張旭市大久手町上切戸70）

お問合せは下記までどうぞ

<http://asahikonsei.com/>

（松本：☎0568 - 91 - 7922）